

研究主題 難言教育の専門性の向上に向けて

団体の概要：東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会は、東京都の公立学校難聴・言語障害通級指導学級の研究会である。都内区市町村の小学校を11ブロック、中学校を1ブロックとして、ブロックごとに研究を行っている。例年、都難言協全体の研究発表は、該当するブロックが行っているため、今年度は2ブロック（多摩東ブロック・江東ブロック）の研究について報告する。

多摩東ブロック

「読み書きに苦手さがある児童の見立てと指導について」

I 研究の目的

東京都の難聴・言語障害通級指導学級の全担当者に占める経験年数10年以下の担当者数の割合は、高い状態であり、調布市、府中市、武蔵野市、三鷹市、西東京市、稲城市の8校からなる多摩東ブロックにおいても同様の実態がみられる。その中で、読み書きについての見立てや指導の力を高めたいと希望する教員が多いため、読み書きに苦手さがある児童について、ある程度の見立てができること、在籍学級担任に相談された際にも説明できることを目指し、上記の研究テーマを設定した。

II 研究の方法

読み書き困難に関する研究を進めるために、まずは、前提となる言語発達について共通理解できるよう、「言語・コミュニケーション・読み書きに困難がある子どもの理解と支援」（学苑社）を全員で学習した。そして、少人数で深く学べるように2、3校ずつに分かれて「仮名文字」「漢字」「児童の個性や環境に即した指導や合理的配慮」の3分科会で研究を進めた。どの分科会も児童の実態を丁寧にアセスメントする過程を大切に、「ブロック全体の力量の底上げ」というねらいを押さえた研究を行った。ブロック全体の教員の力量向上にあたって、横浜国立大学准教授の後藤隆章先生に御指導いただき、読み書きの知識や検査法、指導方法を学んだ。後藤先生には教育の分野は「人格の完成」が目標であること、検査結果だけでなく、子供自身の達成感や学習意欲の変化を重視して指導をしていくことが大切であることを助言いただき、これらを意識しながら研究を進めた。

III 研究の内容

<仮名文字分科会>

教育的アプローチを軸に本人のためになる検査でアセスメント（ひらがな単語聴写、STRAW-R、言葉遊びでの確かめなど）を取り、困り感に寄り添う見立てを行い、負担を強えず児童が成果を自覚できる指導を行った。指導を進めるうちに新たな困り感や課題が出た際に、その都度適切なアセスメントを検討・

実施し、児童の意欲や自信につなげるよう指導を工夫した。アセスメントの選択肢が広がり、教育的アプローチの視点でアセスメントができるようになった。仮名の読み書きの苦手さについて見立てをして指導計画を立てられるようになった。

<漢字分科会>

経験年数を考慮した5名程度の少人数のグループで事例検討を行った。また、STRAW-Rを共通して実施し、STRAW-Rについての勉強会をすることや、その他の読み書きに関する検査の勉強会を行った。事例を基に指導方法を出し合い、多様な特性のある児童に対する指導の引き出しを増やした。「指導終了時の理想的な姿」の実現に向けて、逆算して指導内容を組み立てることや、「何文字の漢字を読み書きできるようになったか」だけでなく、自分に向いている学習方法を意識できるようにすることの大切さに気付いた。

<児童の個性や環境に即した指導や合理的配慮分科会>

児童の全体的な様子を把握できるチェックシートを作成し、チェックシートを基に分科会で事例を共有し、指導方針を検討することができた。また、同じチェックシートを継続して使うことで児童の変容が見えやすくなった。研究を進める中で、在籍校や家庭と連携した合理的配慮の大切さを改めて感じ、合理的配慮の実践例や手順を整理し、分科会でも実践した。児童・保護者・在籍学級担任の思いや考えをくみ取り、共通理解を図るなど、適切な合理的配慮を進めるためのポイントを確認することができた。

IV 研究の成果と課題

少人数で話し合えたことで、児童を見立てるところから研究を進めることができ、質問や意見を出しやすかった。児童の変容として、読み書きスキルの向上ばかりに目を向けるのではなく、改善の実感や自信の向上など「人格の完成」につながるような変化を目指すという共通認識ができた。また、読み書き以外の課題や本人の思いなども、在籍学級担任・保護者・通級の三者で把握することができた。しかし、それぞれの成果を分科会の枠を超えて共有・実践し合い、意見を求める時間を十分もてなかつたことが課題として残った。

江東ブロック研究会

「児童の言語力の向上を図る指導の工夫」

聞く話す分科会

「会話を通して児童の言語力の向上を図る指導

～教師側の視点をもった関わりを通して～」

読み書き分科会

「児童に応じた漢字習得を図る指導の工夫

～多様な学習ルートの活用を通して～」

I 研究の目的

江東ブロックは3区9校からなり、各校の構音や吃音、難聴を主訴とした児童において、言語発達の課題を併せ有するケースが多く在籍している。多岐にわたる児童の課題に対応するため「聞く・話す」「読み書き」の2つの分科会に分かれて研究を進めた。指導力を向上させることを目指し、研究のテーマ、分科会のサブテーマを設定した。

II 研究の方法

東京学芸大学名誉教授大伴潔先生、東京学芸大学講師村尾愛実先生より指導・助言をいただき、研究を進めた。

○聞く・話す分科会

会話における課題を見極め、適切な言葉掛けや関わりをすることで、会話を通して言語力を育てられるのではないかと考えた。

会話の逐語録を取り【会話マナー・語彙力・構文力・感情表現】の4観点について評価した。また、教師側の自己評価も行った。

「児童の会話の観点チェックリスト」「教師の関わりチェックリスト」を作成し、その後に事例検討とリストの見直しを行った。

○読み書き分科会

分科会で適切な検査バッテリーを検討し、生活や学習の様子と合わせて見立てを行った。

視覚、言語、運動、意味の「4つの学習ルート」を活用した事例について、ブロック会で協議を行った。一人一人に適した漢字習得の方法を検討した。

III 研究の成果と課題

(成果) チェックリスト、精選した検査バッテリーを活用することにより児童の課題が明確になった。会話における教師の関わり方を評価し、実態に応じた支援を工夫できるようになった。漢字学習における「4つの学習ルート」を学んだことで、漢字指導に見通しがもて、指導仮説を立てやすくなった。各校の実践事例を共有し、指導方法の引き出しが増えた。

(課題) 分科会間の情報共有、実践、検証が十分に行えなかった。今後は研究を有効に活用し、指導力の向上を図っていく。

<令和6年度連絡先>

団体名		東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会	
代表者	所属	東大和市立第七小学校	
	職氏名	校長 吉村 浩	
	連絡先	042-563-3831	
事務局	所属	東大和市立第七小学校	
	職氏名	主任教諭 山田 早霧	
	連絡先	080-4088-4268	
団体ホームページ	URL	https://www.tonangen.com/	二次元コード
			